



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.218
2021.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S.モースと坪井正五郎のはざままで —

鈴木 正博

● 第42回 ● アメリカンアンソロポロジストの土器時代論

長谷部言人から松本彦七郎への指導は山内清男の「石器時代にも稲あり」を引き合いに出すまでも無く、驚くほどに懇切丁寧である。文献は省略に従うが、長谷部言人の先行研究となる【1】層位別年代細別と【2】層位別土器装飾変化(複雑から簡単へ等の概念化)の2視点を言葉巧みに引き継ぎ我が物と化し、敗戦後は盗作疑きの本歌取りとは気づかれずに松本彦七郎が学史的な原著であるかのように流布してしまう。

特に【1】・【2】の2視点を踏まえるならば、「宝ヶ峯下層期(式)」は加曾利B式研究の理解に重要な標準となるが、資料の実態は片鱗も図示されず、幻の「宝ヶ峯下層期(式)」である。

しかも【1】・【2】と同時期の大正8(1919)年に相次ぎ発表された【3】小金井良清の歯牙変形論や長谷部言人の抜歯風習論に刺激を受けるや、第3の視点も【1】・【2】と同様に【3】に倣い、青島貝塚や里濱貝塚から自身の調査で検出した埋葬人骨とその風習への接近とする。

また、該期の人類学教室の動向を見るならば、鳥居龍蔵は大正5(1916)年まで韓半島の調査に従事する。その結果、弥生式文化の石器と韓半島との強い類似性を以て移住民族を推定し、弥生式「固有日本人」説を導く(例えば、(1917)「機内の石器時代に就いて」『人類学雑誌』第32巻第9号等)が、濱田耕作等も入り乱れる等弥生式民族論争は大境洞窟の層位との整合性が必要であり、省略に従う。

松本彦七郎が活躍した頃、鳥居龍蔵は自身の論文として大正9年の「武蔵野の有史以前」『武蔵野』第3巻第3号を挙げ、その要点を「関東の石器時代(アイヌ派)には部族として薄手式土器と厚手式土器との二群があります。然るに是等(特に薄手式に)の中に時として関東にない奥羽にのみある所謂出奥式土器(従来の亀ヶ岡式土器)が混在して居ります。」(ゴチック体は引用者、以下同様)と「同時代異部族説」を紹介するもの

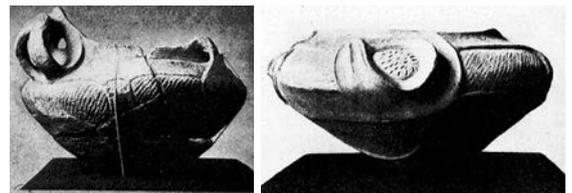
の、松本彦七郎への具体的な反応はなく、「附言 松本理學博士の日本の諸雑誌及びアメリカンアンソロポロジストに出されました土器時代論に就ては追つて私の考を述べて見たい。」((1923)「石器時代に於ける関東と奥羽との関係 殊に土偶に就て」『人類学雑誌』第38巻第5号)と後日に期す。直後の9月1日は関東大震災で神奈川県や東京都は甚大な被害を受け、人類学雑誌も一時休刊を余儀なくされる中、翌大正13年には『諏訪史』が刊行され、「気宇壮大な構想」(寺田和夫『日本の人類学』)の「同時代異部族説」が詳細に論じられる。

鳥居龍蔵が「土器時代論」と評する最新論文、それがアメリカンアンソロポロジスト((1921)「NOTES OF THE STONE AGE PEOPLE OF JAPAN」『AMERICAN ANTHROPOLOGIST』N.S.,23)である。第47図は松本彦七郎の層位による年代細別と新古である。“Lower earlier stone age”→“Upper earlier stone age”は「青島式」→「大木式」に比定されるが、層位による導出は無く、しかも新古は逆転する。“Middle mediaeval stone age”→“Upper mediaeval stone age”は本連載第36回等で触れた「瀬澤式」(「宮戸島下層期(式)」)→「宮戸式」(「宮戸島上層期(式)」)であり、層位も新古も逆転する。

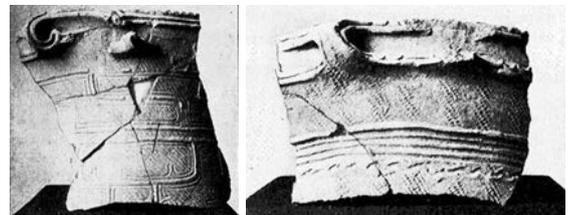
不明を音痴に例えるならば、土器音痴が考古層位に欺かれる学史は引用者の自己責任となるが、石器音痴が地質層位に欺かれる平成の犯罪は考古学の責任重大で共犯となる。

さて、“Lower mediaeval stone age”は層位関係から「宝ヶ峯下層期(式)」と推察されるが、ここでも写真掲載が無く、幻の「宝ヶ峯下層期(式)」の状況が続き、その実態を知る長谷部言人にとっては暫くして山内清男の訪問を得るや、めでたく土器音痴から解放されることになる。

▼第47図:『AMERICAN ANTHROPOLOGIST』N.S.,23掲載土器



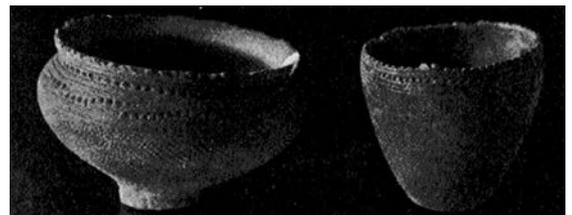
“Lower earlier stone age”(大木10式)



“Upper earlier stone age”(大木8a式)



“Middle mediaeval stone age”(大洞C2~A式)



“Upper mediaeval stone age”(大洞BC2~C1式)

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 アメリカンアンソロポロジストの土器時代論(第42回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第35回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第211回) 武井成実 …3
■考古学者の書棚 「聞き書 アイヌの食事 日本の食生活全集⑧」 福井淳一 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第35回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

7. 吉備真備の母「楊貴氏墓誌」の謎(4)

前回までに示したように、江戸時代以来著明だった、吉備真備母の墓誌「楊貴氏墓誌」は、古い墓に使用されていた埴に、江戸時代人が文字を偽刻したと近江氏は感じたのであろう。それは同氏が、「真備祖母骨蔵器」に接した地で、新しく20世紀になって学者によって出土が確認された、伝楊貴氏墓誌出土遺構に類似の、埴敷きの火葬骨蔵器が発見された時からの課題だったのでは?…。しかもその遺跡地域では、埴と同質同形の埴を利用した偽物くさい資料があり、弥生土器片に文字が偽刻された物までもあることを知っていた。

そこに岸先生の論文を目にし、間違いなく楊貴氏墓誌もその類だろうという思いに駆られたのではなからうか。近江氏の頭には中央の学者にはほとんど知られず、知る人には偽物視もされている資料で、「矢田部益足買地券」とされていた同文2面もの埴があったのでは…

…ただそれを言うことは、その資料を展示している倉敷考古館開館を指導した先生方に、忖度し証明とするのは控えたのではなからうか…。彼の偽物証明にはこの資料は出てこなかった。

近江氏が示した、「楊貴氏墓誌」の今一つの偽点として、干支を問題視している。それは墓誌に記されている「天平11年」銘のすぐ後に干支は入るべきなのに、最後に別書きしているのはおかしい、との指摘なのである。

しかし我が国で元号が採用されてからは、公文書には元号のみの記載が正式だったようだ。正倉院文書など見ても、公文書では元号だけの文書に統一されている。ただ人の死亡時を記すときには、干支併記の時や、干支だけの場合もある。これは現代とは逆で、絶対的な紀元年代意識のない中で、干支は60年間の確実な実年表記でもある。近い時期まで相手のなど歳を聞いた場合「ああサルですか、私と一回り違う」などでも通用。人間の年齢を知るには、干支が一番記憶されたものであろう

還暦が人生の大きな節目だったのもそのせいだろう。

古事記編者の太安万侶の墓誌なども「癸亥7月6日卒」とし、墓誌制作時と思われる年銘は「養老7年12月15日乙巳」とある。卒時の「癸亥」は当然養老7年である。この墓の元号記載法も、当時の公文書的表現といえよう。

公文書的に記された、簡略な真備の母の墓誌は、干支を最後に別記してもおかしくない。真備祖母骨蔵器の銘文を、若い日の真備が書いたと思っている私には、その最後の干支が死を示していた前の干支と違っていただけに対し、多くの人は文字の間違いと指摘していたが、私には埋葬時期ではともおもえた。こうした几帳面な点が、むしろ真備の性格の現れに思われた。母の墓誌に対しても、逆な形ではあるが、母の死の歳をきちっと書き足したもので、かえって真備の制作を思わず点である。私的な感想だが…

私が「楊貴氏墓誌」が本物と思えたのは、こうした近江論文への個々の反論だけではない。基本はこの墓誌に使用されて

いた「亡」字の書き方であった。古代の文字の形態も筆跡鑑定なども、全くの素人と言うことではないのは承知しているが、わずかな知識ながら、古代の出土木簡や正倉院文書、中国の古い石碑拓本などから考え付いたことであった。多少とも最後にここで、この「亡」字に関して簡単な図示をして、この項を終わろうとも思った。ところが、全く思いもかけない妙なめぐり合わせで、駄文が次回まで長くなった。

実は前にも記したが、2018年7月倉敷市真備町の大水害に関係してまとめた本が『奈良時代・吉備中之園の母夫人と富ひめ』だった。この中には、このアルカ通信に続けているような内容も含めていた。また同時に、この本の共著者でもある、夫・間壁忠彦の死後2年目、いわゆる三回忌に、被災地とともに、生前お世話になった方々に、お礼も込めて寄贈するため作成した本だったのである。

2019年12月28日が三回忌の命日。その年の12月18日付けで、やっと本が出来上がり、多くの方や親戚へ送ることができたのである。ところが12月25日ころからのお電話やお礼状では、12月24日・25日の新聞紙上で、吉備真備が中国留学中に、唐代の官僚のために墓誌の文字を書いたとのニュースだった。私が、まだやっと新聞を検討したばかりという時である。多くの方から、この件でお便りをいただいたことは、大変感謝したことだった。

このニュースは私にとって、大きな感動だった。吉備真備長い留学期間、どのように過ごしたのか。国からの留学生といっても、まだ完成した国家機構とは言えない時期である。真備の父は中央では、中級官僚に過ぎない。かつての地方豪族とはいえ、中国にまで支えが届くのか。しかも帰国時には、かなり大量の貴重な物品や資料を持ち帰っている。

だがあのニュースに接したとき、彼の中国での活躍の場はあったのだ、長期間、多くの貴重な学問を自由に学び、物品も集めたのが、こうした知識や技術があったからではないか…

彼は少年時代から、墓誌に文字に関心があったのではないかと… わずかばかり断片で示された新聞紙上の、墓誌拓本の一か所に、探し求めた「亡」字までがあった。(次回図示)

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 211

殿村遺跡 ～長野県松本市

武井 成実

私が紹介する遺跡は、長野県松本市四賀地区会田に所在する「殿村遺跡」です。松本市の北東部に位置する四賀地区は、周囲の山々を介して北は筑北盆地、東は上田盆地、西と南は松本盆地に接しており、古くから交通の要衝として栄えてきました。また、会田地区の北方にそびえる虚空蔵山は、その美しい山容から「会田富士」とも呼ばれ、この地域の象徴として古くより人々に信仰されてきました。



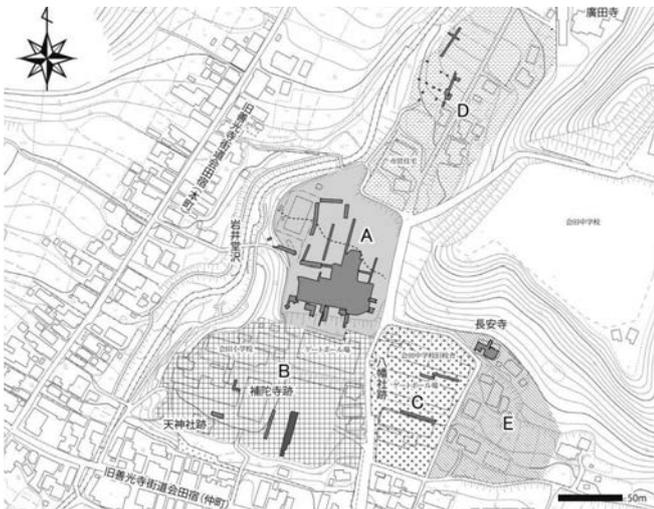
▲殿村遺跡(中央)と虚空蔵山(右上)(松本市教育委員会2018より引用)

殿村遺跡は、虚空蔵山西麓から流れる岩井堂沢と、会田盆地北部を西に向かう会田川との合流点付近、両河川の浸食活動によって形成された、会田盆地を見下ろす高台にあります。

平成20年(2008)、四賀小学校建設計画の一環としてはじめて殿村遺跡の発掘調査が行われました。その結果、15世紀～16世紀を中心とした大規模な造成跡から、石垣や石列、礎石建物跡、瀬戸産や中国産の陶磁器、茶道具など、貴重な遺構・遺物が多数見つかりました。

この調査成果に対する各会の反応は非常に大きく、平成21年には地元の四賀地区から殿村遺跡保存の要望が提出され、市は遺跡の現地保存と学校建設地の移転を決定しました。

この調査時に見つかった大規模な造成跡は、当初、会田氏居館跡と推定されていました。会田氏とは、会田厨師の地頭であり、会田周辺を領した国人で、殿村の地に居を構えていたと伝えられていました。



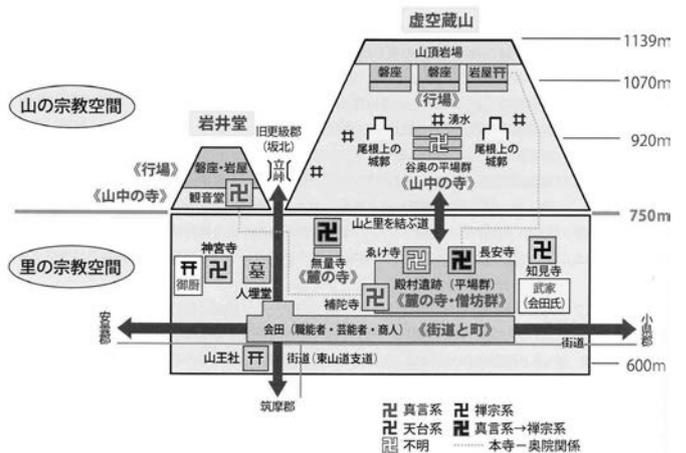
▲殿村遺跡ゾーニング(松本市教育委員会2018より引用)

しかし、等質的な平場遺構の群在、武家に先行して導入されている石の土木技術、儀礼用具や茶道具の出土等といった特徴から、殿村遺跡は居館跡ではなく、寺院跡である可能性が高いことが分かりました。

このように殿村遺跡を宗教遺跡として捉えたとき、その性格を究明する上で欠かせないのが、遺跡の背後にそびえる虚空蔵山です。そこで、殿村遺跡の継続的な発掘調査と併せて、虚空蔵山を中心とした会田地区周辺の総合調査が実施されることとなりました。

そうして知られるようになったのが、虚空蔵山宗教遺跡群(仮称)です。これは、殿村遺跡と虚空蔵山城跡を中心に、虚空蔵山とその南西麓一帯に分布する中世の遺跡群です。

虚空蔵山中では、信仰の場であったと考えられる岩場や平場、城郭跡と考えられる平場等の遺構が確認されており、宗教空間の核である山が戦国時代に城郭へ変容する様子を示す事例として重要視されています。



▲虚空蔵山宗教空間の仮設モデル(松本市教育委員会2021より引用)

虚空蔵山宗教遺跡群は、このように山中の遺構群と山麓の遺構群(殿村遺跡)から構成されており、聖地としての里山を核とする中世の宗教空間を象徴する遺跡群です。

こうした重要な遺跡の調査・保存・活用も、地元の方々の理解と協力、そして「遺跡を残したい」という強い思いがなければなし得なかつたろうと思います。文化財の保存・活用には、地域の方々の理解が必要不可欠であることを改めて認識しました。

私は現在博物館に勤めており、発掘調査等で遺跡に直接触れる機会はあまりありませんが、関係部署と連携しながら遺跡の価値を広く発信し、地域の方々と相互に学習、協力し合える下地作りにも貢献していきたいと思っています。

参考文献:

- 松本市教育委員会2011「殿村遺跡 第一次発掘調査概報」松本市文化財報告208
- 松本市教育委員会2018「殿村遺跡 第8次発掘調査報告書 虚空蔵山城跡 第2・3・4次発掘調査報告書」松本市文化財報告231
- 松本市教育委員会2020「殿村遺跡 発掘調査報告書(第1・9次・総括)」松本市文化財報告239
- 松本市教育委員会2021「会田虚空蔵山 虚空蔵山宗教遺跡群(仮称)総合調査報告書」松本市文化財報告243

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは福沢佳典さんです。

考 古学者の書棚

「聞き書 アイヌの食事 日本の食生活全集④」

萩中美枝・畑井朝子・藤村久和・古原敏弘・村木美幸 著／農山漁村文化協会(1992) —— 福井 淳一

はじめに

考古学から食にアプローチするにあたって、多くの疑問が沸き上がる。その疑問に答えるには、多様なデータと経験を必要とするが、同一地域での実例にあたる必要があることは言うまでもない。発掘調査を北海道各地に出張して行う職場に勤務しているため、発掘現場を共にする地元作業員さんから山菜や魚類などの利用に関する現在の知識は比較的容易に得ることはできる。ただ、近過去における食の実際をまとめた書籍は意外と多くない。そのために最初に書棚から手に取るのが本書である。

特徴は、地域毎の伝承者の食の風景を記述している点にある。I章は「静内地方の食」として、織田ステノさんの暮らしと食べ物、II章は「浦河地方の食」として、浦河タレさんの暮らしと食べ物を、それぞれ詳細に記述する。III章は「アイヌのいろいろな料理と加工」と題して、「樺太地方・金谷フサさんの暮らしと食べ物」、「熊の霊送りと料理」(白老)、「アイヌの酒づくり」(静内：織田ステノさん、阿寒：日川キヨさん)をまとめている。IV章は「食素材の確保と加工・貯蔵」について、織田ステノさんの植物に関する知識が記述されている。V章は、「ウエベケレ」として、食についての口承文芸を掲載している。これも織田ステノさんが伝承されたものである。以下に、筆者が興味を持った内容を中心にアイヌの食文化の一端を紹介する。

1. 食材選択

P136～139の「食の素材一覧」は圧巻である。当たり前ではあるが、遺跡から検出可能なものがいかに少ないかという事実を改めて突きつけられる。特に植物は、遺跡から検出不可能なものが多く利用されている。なかでも葉や根茎、花が利用される草本類や、樹液が利用された樹木、海藻類、キノコ類の利用状況は推測するしかない。また、P172～201の食用植物の採取・加工・貯蔵の実際を読むと、その多彩な様に想像が膨らむ。

なお、食生活の変化や環境変動があったとはいえ、縄文時代以降近代まで北海道の生態系下で選択可能な主要食材は大きくは変化しなかったとみられる。したがって、同一地域における食材選択の実例は大変に参考になる。

2. 調理

本書中では各調理法の具体的な料理の様子が描かれる。作り方や味覚、作る場面とともに食欲をそそる。

日常食の基本は、鍋で作るオハウやルルと呼ばれる汁物で、山菜、野菜、肉類、魚類を煮て、魚油・塩で味付けしたという。具が植物中心の場合、出汁は昆布や魚の焼き干しを使い、アクは取らずに最後に葉物に吸わせて薬分として摂取したらしい。

また煮物や「あえもの」はラタシケツと呼ばれる。季節の山菜などを用いて、大抵は湯通ししたが、若葉はそのまま用いた様である。魚油・獣脂や魚の焼き干しなどで味付けし、薬味には香りのある植物を散らした。

ほかにサヨというヒエやコメなど穀類のおかゆもよく食べられた。具に植物、海産物を入れたが、鳥獣類は使わないらしい。

祭りでは、以上のほかにチサッスイェブというご飯もの、シト(団子)、ヒエ酒も作られる。ヒエ酒仕込みの様は、神聖さを伝

える。祭りの一つ、熊の霊送りには、多様な食材、多量な食材を必要とする一方、冬に行われたので、夏から準備し保存した。食材の保存は、生存のためだけではないことがよく分かる。

3. 調味料

特に重視されたのが魚油や獣脂である。陸獣ではヒグマ・エゾシカ・タヌキ・イヌ、海獣ではオットセイ・アザラシ・トド・イルカ・シャチ・クジラ、魚類ではイワシ類・ニシン・スケソウダラ・マンボウ・サメ類、ウミガメ類、鳥類ではハクチョウ・シギなどを利用したという。脂肪は炒って採取したほか、煮出して掬い取る方法もあった。保存は、固形になるシカ脂は固めてそのまま冷暗所に下げておく。半固形のヒグマ脂や液状の海獣脂・鳥脂・魚油は脂袋に入れて炉棚に下げておく。北海道の食における脂肪の重要性は、北方圏に共通するものである。また、魚卵も漬してあえ物にしたり、乾燥保存したりしていた。

塩分は、購入するほか、海に近い沿岸部では海水を利用し、水で薄めて調節したという。携帯用には濃縮海水を植物繊維に染み込ませたものを利用したらしい。ただ基本的に塩分は獣類内臓の生食や血液の飲用で摂取できていたとされる。ちなみに、北海道では近世～近代には製塩が試みられたが、定着しなかったのは寒冷・乾燥という製造環境が影響したのであろう。

4. 加工・保存

アイヌの食文化で特に注目されるのはサケの利用と思われる。加工法は、他書にも記述があるものの、本書では写真と共にその利用の実際が詳細に述べられている。中でも、季節や種により脂のりや虫害・腐敗可能性に差があり、加工・保存に急に注意がなされていた事がよくわかる。すなわち、素干しにする季節は蠅などのいない秋から春で、夏場は焼き干しにするのが一般的であったようである。なお、初冬から厳冬期の2月中旬であれば屋外で凍結させて「ルイペ」として保存する方法もある。また、20cm前後の中型魚、小型魚の焼き干し方法など、他書にはない記述がみられる。

漫画『ゴールデンカムイ』で取り上げられた、たたき料理：チタタブについても、動物種ごとの作り方が述べられている。魚類など種によっては骨も一緒にタタキとする。リス類のように食べる部分が限られる場合も皮を剥いだのち、陰部や胆囊以外丸ごとタタキにしたほか、団子にして汁に入れたという。

おわりに

本書の記載時期は、概ね昭和初期である。「はしがき」には、戦時中の食糧難の際には、食文化の伝承を活かして豊かに暮らしたとある。地域の恵みを利用する営みは現代にも伝わっているだろう。ただ、収録地域が日高地方に偏っているので、注意は必要であろう。本書を読むと日高地方でも細かな地域の差がある事が分かる。本稿ではその細かな地域性を問わずに紹介したが、地域ごとの細かな差こそを味わってほしい。

アルカ通信 No.218

発行日 2021年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp